



Great Pastime

written by slow
binding photo : nonchi

Great Pastime

= 1. 発現 upspring =

また姉に『飛んだ』。もうこれで七回目だ。

僕は今、同じ屋根の下で暮らす、姉の部屋にいる。

足裏に妙な感触を認識すると同時に、砂を噛んだような音が鳴った。ゆっくりと足を上げると、かかとに潰れたスナック菓子の残骸がへばりついてた。

おいおい。なんで床にスナック？ しかも欠片じゃなくて丸々だ。落ちたのに気付かなかったんじゃないで、落としたのを確認しておきながら、拾わず放置したんだろう。

ため息をつきながら部屋の中を見回す。

ゴミ箱に高く盛られた使用済みティッシュは、いくつか山から崩れて床に落ちている。部屋中いたるところに転がるコンビニの袋。脱ぎっぱなしの服や靴下、下着が山のように積まれたベッド。いや、ベッドはそれらで埋もれて、どこにあるかわからない。一体どこで寝てるんだ、この人は。

テーブルの上には、中身が飲みかけのペットボトルが都心のビル群のように立ち、その中身がテーブルに垂れて固まって、べたべたとした染みが広がっている。他にも、未開封の変色した菓子パン、間にテレビのリモコンが挟まれた読みかけのマンガ、切抜き途中の雑誌が開きっぱなしで何冊も散乱している。部屋の隅に置かれた机に目を向けると、びっしりと化粧品や香水が並んでいた。教科書や参考書はおろか、書籍といえば音楽、ファッション系の雑誌しか見当たらない。いくらなんでもこれが高二女子の部屋とは。

こんな姉でも、学校では陽気で明るく友達の多い、ごくごくありふれた女子高生をやっているらしい。女ってのは本当に怖い。いや、内と外とでここまで凄まじいギャップがあるのはうちの姉だけだろう。ぜひ姉だけであってほしい。世間一般の女性の大半は違うはずだ。十五の少年が女性に抱く幻想、やまとなでこ幻想や女神幻想を、どうかどうか壊さないでくれ。

そんな望みを祈る僕は、今、がさつでずぼらな姉の中にいる。

姉の部屋にいる、という意味ではない。あ、いや、実際、最初に言ったとおり、姉の部屋にはいるんだけど、姉の部屋にいて、さらに姉の体の中にいるってことだ。

僕の意識が、姉の体の中に入り込み、コントロールしていると言い換えてもいい。

たんすの横の、白い縁の姿見を眺めた。

超ミニのスカートに、上着を出して着崩した制服、胸の前でアゲハチョウのように広がるリボン。付けまつげやらアイシャドーやら口紅が塗りたくられた顔をじっと見つめる。僕が見つめる鏡の中のその顔は、女装した僕の顔ではない。紛れもなく姉だ。目じりを下げ、その分だけ口角を上げ、歯を見せてにかっと笑ってみる。家では絶対見せない姉の笑顔。今度は駄々をこねる幼い女の子よろしく、身をくねらせてみた。こんな姿も見たことがない。ついでにもう一つ、絶対やらなそうなポーズをやっておこう。眉をハの字に下げ、眉間にしわを寄せ、目を潤ませて、「すみませんでした」とつぶやいてみた。

ああ、ない、ない！ この人のこんな姿、一生見ることはない！ と心の中で独りごちた。言い知れぬ快感で、鼻の穴がひくひくと動く。その顔を鏡の中で見て、羞恥心を感じ、再び冷静さを取り戻した。

同時に、そろそろ疲れが溜まってきた。これ以上はうまくコントロールできそうにない。

姉の体の中の僕は、意識を、隣の部屋の僕の体に向けて目を閉じた。とんでもない電力の光源が迫りくる感覚。だいぶ慣れた。いつもと同じだ。

しばらくして、ゆっくり目を開く。ベッドから上体を起こそうとして、めまいがした。再びベッドへ倒れこむ。何回か深呼吸する。それから体をよじると、足をベッドの外へ投げ出して、手をつき、もう一度起き上がった。机の置時計を見る。実行から七分経っていた。窓を見るとガラスには、ジャージ姿でベッドに座る僕が見えた。僕の意識は再び僕の体に戻った。大丈夫、また成功だ。

ここまでの経緯を振り返ってみる。

今日はこの部屋から、道を歩く帰宅途中の姉に飛んだ。

家から五百メートルくらいは離れていただろう。それ以上離れた距離だと、今のところうまく飛べない。

姉の体を『コントロール』しながら、そのまま玄関を開けた。

「ただいまー、着替えたら夕飯の準備手伝うね」と素朴で明るい声色をしてみた。

台所から母が顔を出したと思ったら、「あら、なによ。気持ち悪いわね。そんな声出しても、これ以上お小遣いはあげないわよ」と言い放って、ひょいっと引っ込んだ。

僕がせっかくな子役を演じてみせたのに、この人、母さんの信用ゼロだな。

姉の体に入った僕は、呆れつつも不憫に思うことはなく、そのまま階段を上がった。

二階は、僕の部屋と姉の部屋が並んでいる。僕はまず、自分の部屋のドアを少し開け、中を覗いた。ジャージ姿でベッドに横たわる僕がいた。鏡や映像以外で見る自分の姿というのは、あいかわらず気持ちのいいものではない。まるで魂の抜けた死人を見るようだ。部屋には入らずそのままドアを閉め、一つ奥の、姉の部屋へ入った。

そして中のひどい有様は、先ほど見たとおりだ。ここまで正味七分。

姉の部屋の姉から、僕の部屋の僕に戻った僕は、勉強机に座ると、棚から取り出したノートを開き、メモを取る。

まず日付、次に、〈距離五百メートル、乗っ取った時間七分、軽いめまい〉と続けた。

「あれー、なんでわたしここにいるわけー？ なんなのよー！」

隣の部屋から姉の叫びが聞こえた。ノートに、〈姉、異常なし〉と追記した。

この一連の非現実的な現象を説明するのはかなり難しい。

一言で表すときに、最初に思いついたのは幽体離脱というワードだった。ただし、あれは自分の魂が自分の体から離れるだけで、誰か別の人間の体に入り込んだりはしない。だったら、『いたこ』みたいなものか？ いたこは自分の体に靈魂を呼び寄せて、その意思を伝え告げる。いや、ちょっと違う。言ってみれば『逆いたこ』か？ しっくりはこないが、まあ、遠からず、といったところか。ただ、僕の場合は、自分の体から自分の意識（ひょっとしたら魂なのか？）が別の人間に飛び、その人間の体が一時的（今はそれが、七分になった）に僕のものになる。なにせ、その人の体をコントロールできてしまう。これはもはや『逆いたこ』どころではない。

考えるだけで二、三キロ体重が落ちた気分になる。

廊下をせわしなく横切る足音が聞こえたかと思うと、どたどたと階段を下りていく。

——お母さん！ あたし最近頭とか打ったっけ？ あとさ、いつ家帰ったっけ？

姉だ。一階に向かって叫ぶ声がした。

——はあ？ 何をわけわかんないこと言ってんの。

台所から母さんののんびりとした呆れ声が響いた。

——そんなことより、さっき夕食手伝うって言ったわよね。ほら、お皿並べて！

——ちよい、待った待った、マジなに言ってのんかわかんないし。これって記憶喪失？ だったらヤバくない？

何かを問かけ直すエネルギーを使うのも惜しいのか、一階の母さんの声はぴたりとやんだ。姉は引き続き、「あー、ストレスかなあ、記憶飛びまくりだし！ マジ脳がイシュクしてんのかなー」などと嘆いている。ていうか、わめいている。僕が姉の体に入らなかったとしても、姉はいつも支離滅裂なことばかり言っているから、家族は気にも留めない。

もう一度言おう。

この一連の非現実的な現象を説明するのは、やはり難しい。

自分の意識を持ったまま、ほかの人の体に入る能力は、生まれながらに持っていたわけではない。そもそも僕には、

そんな特殊能力を持つような甲斐性はない。

名前は陽一。まあ、普通だ。父・母・姉・僕の、世間一般的に中流階級を自負する四人家族で、慎ましやかに暮らしてきた。中三の僕にとってもっぱらの悩みは、彼女がいないことと、今年受験があることくらいだ。そんな感じの、ごくごく平凡な僕なのに、この能力はある日突然、本当に事故のようにして、意図せず身についてしまった。

きっかけは、やはり姉だ。不精でだらしがらないのは部屋だけではない。

あの人とは生まれたときからずっと同じ家で暮らしているが、十五年経った今でもまったく慣れることがない。カバンとか手帳とかノートとか、持っているものを置くとき、いつも放り投げるし、音楽は重低音を効かせて大音量を流し、トイレに入っている間もドアが半開きだし、電話でのしゃべり声が異常にでかいし、電話は「じゃあね」も言わずにガチャンと切るし、足のネイル用に指の間に挟むスポンジを食卓に置くし、歯を磨くとき水を出しっぱなしにするし、テレビのチャンネルはカチャカチャ変え続けるし、食事中はくちゃくちゃと咀嚼音がうるさいし、服には食べこぼしをつけてるし、ご飯粒を残すし、部屋の植物はすぐに枯らすし、風呂上りに服は着ないし、それを睨むと「すけべ」と言い返してくるし、あぐらはかくわ、いびきはかくわ、ブウと屁はこくわ。

挙げればきりがない。しかも、がさつでずぼらに加え、粗暴でもある。

格闘技観戦が好きな姉は、技をかけて楽しむ性癖がある。かけられるのは専ら僕だ。姉は基本、観戦メインで実際にやっているわけではないので、素人といえば素人なのだが、どうしてこれが、なかなか技が極まる。

「いててて、姉ちゃん、やめろよ、腕折れるって！！」

三ヶ月前、腕ひしぎ十字固めというのをかけられたときには、幸い腕は折れなかったが、なぜか肩を脱臼した。「あれー、おかしいな、大丈夫？」とか言いながら悪びれもせずに首をひねる姉は、同じ人間とは思えなかった。泣きべそをかいて呻く僕の顔を覗き込んだかと思えば、今度は三角絞めかけさせてね、などと微笑んできた。

脱臼の翌日は、大事をとって学校を休んだのだが、きっかけはその夜だ。

肩から腕に包帯を巻かれて、いらつきながら片手で夕食をとっていたとき、電話が鳴った。

父は残業で遅くなると言っていた。姉もまだ帰っていない。母はちょうど二階へ上がっていて、一階には僕しかいなかった。電話は玄関のほうにあったため、急いで椅子を立とうとしたら、ちょうど玄関から姉の声が聞こえた。

「あー、腹減ったー、ご飯はー」

電話がプルルルと鳴り続けている。

ここでいつもなら、「おい、陽一、早く出なよ」と、自分が一番電話の近くにいるにもかかわらず、僕に命令してくるところだったが、このときはなにを思ったのか、僕が駆け寄る前に姉が電話口に出た。

「はい、鈴木でございます」

出た、ソトヅラ美人！ うちの中とは大違いだ。

自分から出てくれただけありがたいことなのだが、しかし。

受話器に向かって姉が発した言葉が、僕を一瞬で凍りつかせた。

「はい？ 徳永？ なに、陽一の彼女？ んなわけないか、ハハハ」

相手が自分に関係のない僕の友達だったりすると、この人は突然いつもの横柄さを丸出しにする。

姉が豪快に笑う。

て、ちょっと待て。

徳永、かすみちゃん？

僕の心臓がとくとと跳ね、手にしていた箸は床に落ちた。

かすみちゃんて、同じクラスの、物静かで、可憐で、日だまりのような笑顔が印象的な、僕が秘かに想いを寄せている、あのかすみちゃん？ なんてかすみちゃんが僕に電話を？

「え？ 日直？ 声小さいな、はっきりしゃべんなよ。ん、なに、今日の授業箇所？」

かすみちゃん、日直だからって、休んだ僕に今日の授業箇所を伝えようと電話してくれたのか。ああ、なんていい子なんだ。まるで天使。あるいは女神。はあ〜、いとおいしい。まだしゃべったことないけど。

……ていうか、おい。姉よ。

あんた、かすみちゃんになんていう口をきいてるんだ……。あんたがこの家で野人のように振る舞うのは百歩譲って可しよう。しかし、だ。あんたがいま話しているかすみちゃんは、あんたの生きる世界とは別の次元の存在なんだ。

「そんないいよ、あいつどうせ勉強なんてしないし、いまさらやったって無駄無駄無駄無駄！ ハハハ」

おいおいおいおい！ だからそんな下卑た笑いを彼女の耳に浴びせるんじゃない！

その間にも、やつ（姉）の、受話器を勝手に置こうとしている姿が眼に入った。

この瞬間だけ、世界の動きが鈍く、スローモーションになった。

やあーめえーろおー、おおーくうーなあああー！

僕の怒りが最高潮に達したそのとき、車のハイビームを浴びたかと思うようなまばゆい光に襲われた。それに耐えられずぎゅっと目を瞑る。光はしばらく続く。一体何が起こったのか、まったくわからないまま体は固まっていた。

ん？

まぶたの向こうで光が消えたことを認識してから、再びゆっくりと目を開け、辺りを確認した。すると、玄関のほうにいたはずの姉がおらず、その代わりに、食卓で気を失っている僕がいた。

状況がまったく理解できない。下からなにやら声が聞こえる。手元を見ると、握られた受話器から声がした。あれ、いつのまに受話器を？ もしもし、もしもし、というかすみちゃんの声だ。僕は深呼吸して心を落ち着けると、受話器を口元まで持ち上げ、清潔な声色を意識して「さっきはごめん。今日はありがとう。明日はちゃんと学校に行きます」と言って電話を切った。それだけで精一杯だった。普段絶対に聞くことのない声。自分が発しているのに、自分の声ではない不思議。今の台詞を発したのは、まさしく姉の声だった。

玄関横の壁に掛けられた丸い鏡を見ると、受話器を置いた姉が映っていた。

これが、僕が他人の体に初めて乗り移るまでのいきさつだ。

= 2. 決意 determination =

突如自分に宿ったこの能力は、夢か妄想だろう。初めは何べんもそう自分に言い聞かせた。

翌日から学校には行ったが、一週間ほどは、それこそ周りから見れば魂が離れた後の抜け殻のようだったかもしれない。めちゃくちゃ落ち込んで、時々なぜかテンションが上がって、次の瞬間泣いていて、人と会うのが怖くて、ちょっと引きこもりになって、今度は学校を三日休んで、もうかすみちゃんからは電話もなくて、暇だからレンタルショップで借りてきた映画を観て、その映画が、階段で転んだのをきっかけに男女が入れ替わってしまう話で、なんだかとても他人事に思えなくて、共感して、励まされて、立ち直った。

それ以降は、物事をようやく冷静に捉えられるようになり、僕は決意した。

同じことを、もう一度姉でやってみた。

するとどうだろう、またしても姉の体に飛ぶことができた。夢でも妄想でもなかった。今度は怒りの絶頂というわけではなく、意識を集中したら成功した。その後は、まずは家族で練習しようと、父や母で試し、飛ぶ対象をいろいろ変えてみては実験したのだ。

僕は目の前に開いたノートをめくった。

これまでに起こったこと、自分のしてきたことは、すべて記録している。

あれからすでに十八回『飛んだ』。(ちなみに「飛ぶ」というのは、乗り移る行為を指している。僕が勝手に使っている、一番しっくりくる言葉だ。飛んで、乗り移っている最中のことは、「コントロールしている」と呼んでいる。やっぱりその言葉も、感覚的に一番あう)

十八回のうち、姉に七回、母に二回、父に二回。そのほかは、家族以外でも可能なのかと、近所のおじさん、おばさん、町内会長さん、担任の教師、男の同級生三人で調べた。そして結果は、その都度ノートに記した。

きれいな白紙のあと、最後の一頁に、ここまで僕が僕の能力について認識していることをまとめてある。

【能力について】

- ① 飛びたい相手に意識を集中させることで飛ぶことができる。(戻るときも同様)
- ② 面識のない人、話したことのない人、動物、赤ん坊には飛べない。(少し話したことがある人には飛べることもあるが、コントロールできるのは数秒程度)
- ③ 他人の体に入ってコントロールする時間が長いほど疲労する。(ちょうど縄跳びを続けるくらいの疲れ)
- ④ 飛べる距離やコントロールできる時間は訓練次第で延ばせる。(今は五百メートル、七分ほど)
- ⑤ 他人の体に飛んでいる間、自分の体は魂が抜けたように意識を失っている。

これが今までの実験でわかったことだ。あらためて読み返してみたが、相変わらず気が重くなる。いったいなぜ？なぜ僕にこんな力が宿ったんだ。わからない。まったくもってわからない。神が何か、使命を与えようとしているのか。それともただ単に、宝くじに高額当選するのと同じように、低確率で偶然に僕だけただけなのか。

いままで何十回何百回と考えてきた。そのたびに首を振る。偶然だなんて思いたくはない。何かあるはずだ。

この能力で、僕は何をすればいい？ 何ができる？

警察官に飛び、無法者を逮捕する？ うん、それはアリかな。でも、いきなりは怖い。もっと身近なことではどうか

テスト中、秀才に飛んで、そいつが書き終わった解答を堂々とカンニングする？ いや、それなら採点中の先生に飛ばばいいじゃないか。ていうか、僕は今、自分の力を正義のために使おうと思ったのに、とてつもなくセコイことを考

えてる。ああ、僕はなんなんだ！

冷静になれ、冷静になれ。深呼吸して、もう一度じっくり考える。

駄目だ。

まじめに考えれば考えるほど、正義とは対極のことしか出てこない。

世界的マジシャンのスタッフに飛び、トリックを盗む？

競馬で万馬券を当てた人に飛び、その券を奪う？

ミッキーマウスに入っている人になり、自由に踊る？

芸能人になり、竹下通りで握手責めとサイン責めを受ける？

金持ちに飛び、おいしいものをたらふく食べる？

アラブの石油王になり、お付きの美女たちに大きな羽で扇いでもらう？

アメリカ大統領の体に乗っ取り、核のボタンを押す？

姉の体で女湯に入る？

あ、最後のは、ベタ過ぎるけど一度だけ本当にやってしまった……。 (鼻血が止まらず、すぐに出たけど)

ほかにも次から次へと⑱禁レベルのあんなことやこんなことばかりが頭の中から湧いて出てきた。

ああ、僕は最低だ！ よこしまなあくま、邪悪だ。不埒なことしか思いつかない。本当にやりたいことはこんなことじゃないだろう。

僕に何ができる。僕の使命は……。

そうだ。

正義が無理なら、愛に生きよう。

僕の愛するひと、かすみちゃん。

姉に乗り移ったとき、受話器越しに姉の声で話しかけたのが初めてで、それ以前もそれ以降も会話したことはないけど。

それでも僕は、彼女のためならなんでもできる。彼女を守るために、この身を尽くそう。

彼女ほどの愛らしい容姿、純粋な心の女の子には、これまでの十五年間、一度も出会ったことがない。彼女はその存在自体が僕の心のよりどころだ。

でもだからこそ、悪い奴が狙っているかもしれない。ストーカーや変質者、通り魔に悪徳芸能プロダクションの社長、風俗業界のスカウト。彼女はそんなものとは無縁な生活をしているから、社会の闇に疎いはずだ。そんな彼女には影で見守るナイトが必要だ。でしゃばるつもりはない。僕が守るからなんて宣言したら、それこそ下心が見え透いている。彼女だって負担に感じるだろう。だからこそ、僕の想いは秘密だ。かすみちゃんに気付かれることなく、彼女の平穏と幸せを守るんだ。

あらためて決意した。僕的能力は、彼女のために使う。

そうだ、それがいい、これこそ使命だ。ああ、胸が躍る。

でも、どうやって？

この薄汚れた世界の困難や苦勞から、どうやって彼女を守る？ 彼女に飛ぶか？ いや、話したことがない相手には飛べない。僕はかすみちゃんの何を知っている？ 何も知らないじゃないか。

だったら、というわけで、とりあえず彼女の家の前まで行ってみた。電柱の影から外観を眺める。ガーデニングの手入れが行き届いたきれいな家だった。二階の窓辺に人影が映った。かすみちゃんかな、と思ったらサーッとカーテンが閉まった。撃沈。そのまま家に戻った。

駄目だ。どうする。どうする……。

そうだ。沙希だ。

かすみちゃんと一番仲がよくていつもいっしょにいる沙希の体に飛べば、かすみちゃんの近くで彼女を守れる。幸い沙希とは中二の時に飼育委員会で何度もしゃべったことがある (ウサギの話ばかりだったけど) から飛べるはずだ。

ただし、かすみちゃんとかなりの至近距離になること、彼女たちの普段の話題をつかむ必要があることを考えたら、すぐに沙希に飛ぶのは危険だ。飛べたとしても話がかみ合わず、うまくコントロールできないかもしれない。まずは沙

希の性格、言動、行動、思考回路を知る必要がある。

そのために僕がしたこと。

それは、佐藤ヒロシに飛んで、沙希を毎日尾行することだった。

かすみちゃんを守るため、沙希に飛びたい。沙希のことを知るために、佐藤ヒロシで尾行する。これが「かすみちゃんを守ろう計画」の段取りだ。

なんで佐藤ヒロシなのか？ いやその前に、佐藤ヒロシって誰だよって話だけど、彼は唯一、僕と小中通算九年間同じクラスだったやつだ。

そうは言っても、たいして親しかったわけでもない。友人と赤の他人の間くらいの関係だ。実は彼も中二のとき、僕や沙希とともに飼育委員だった。その頃、何度か沙希に「明日の飼育小屋掃除は佐藤ヒロシだよ」と確認することがあったが、沙希はいつも「え、それだれだっけ？」と返してきた。だからたいてい次の分担の連絡は僕から佐藤ヒロシにとった。そんな時に何とはなしに、少ししゃべることはあった。深い話ではなく、ちょっとした天気の話、ウサギの体調についてとかだ。

ただ、彼が別の誰かと話しているところは正直見たことがない。佐藤ヒロシは僕にだけ見える霊じゃないかと悩んだこともあったけど、もちろんそんなこともない。たしかに実在する。ただ、みんなにとって彼の存在感が、チョモランマの山頂の空気ほどに薄いだけだ。

飛ぶ前に、いろいろ観察してみた。

佐藤ヒロシは、調べれば調べるほど地味だった。成績は中の中、中肉中背、身長165.3センチ、体重55.1キログラム。私服は地味で、色は三色、黒か白か灰色。絵がうまく、意外と手先が器用。プラモデルが趣味。ペットに小鳥を飼っていて、川を眺めるのが好きな、早生まれのうお座。

早速翌日から、休み時間に彼の体に何度か飛んで、体を慣らした。

他人に飛んでいる間、僕の体は意識を失った状態になる。教室で飛んだらそれこそ危険だ。まずは体育館裏の倉庫へ忍び込み、分別ゴミ用の大きな容器が立ち並ぶ奥のスペースの、新聞紙や古雑誌が高く積まれた奥へと体を押し込んだ。廃品回収は月末と決まっていたので、めったに人は入らない。ここが僕のお気に入りの場所となった。

それにしても、佐藤ヒロシに飛んで彼をコントロールしている間は、クラスの誰からも声をかけられなかった。先生からも、クラスメイトからも。数学の授業中、先生に投げかけられた難問にみんなが沈黙したとき、だれも手を挙げない中、恐る恐る手を挙げてみた。答えがわかったわけではない。ただ、あまりにだれからも認識されないせいで、さすがに不安になってきた。僕はここにいるよ。そんな思いで手を挙げてみた。なのに、クラスのみんはおろか、教壇に立つ先生にさえ目を留めてもらえず、数秒間挙手したまま固まったあと、そのまま手を下ろした。下ろしたことも知られなかったようで、そのあとも誰からも何も言われなかった。悲しいかな、佐藤ヒロシ。いや、すばらしい。この体は沙希の尾行に最適だ。

休み時間、昼休み、放課後、帰り道、日によって時間を変えて、少し離れた所から、時々忍び足で距離をつめて、背後から、あるいはすぐ隣から、彼女の行動、くせ、表情、話し方をチェックした。沙希に近づくということは、同時にかすみちゃんにも近づくことになるが、かすみちゃんにもまったく気付かれていない。あらためて、佐藤ヒロシ、すばらしいぞ君は。

家では姉に飛んで自主練に励んでいたが、最近僕があまりに飛びすぎたせいか、とうとう母に病院へ連れて行かれた。姉ちゃん、すまん。

ただ、この二週間で成果も生まれた。

コントロールできる時間も飛べる距離も飛躍的に延びた。がんばれば一キロ先からでも飛べるし、五十分はコントロールできるようになった。

時は来た。

いよいよ「かすみちゃんを守ろう計画」の始動だ。

= 3. 始動 initiation =

妙に眠たい数学の授業が終わると、校内に昼休みを告げるチャイムが鳴り渡った。いつもなら、しばらく自分の机でぼーっとしてから弁当の箱を開けるところだが、今日は違った。

僕はチャイムとともに教室を出た。ほかのクラスからもぼらぼらと生徒たちが出てくる。なるべく目立たないように廊下を小走りで移動し、ひと気が途絶えたところで階段を一段飛ばしで一気に駆け下りた。

昇降口を出ると体育館側へ回り、だれかに見られていないか辺りを注意深く窺い、安全を確認すると、ずっと倉庫へ入った。

薄暗い倉庫の中は、砂利と新聞のインクが混ざったような匂いが漂っていた。そろそろ沙希たちがトイレへ連れ立つ時間だ。僕は新聞紙や雑誌の山にうずもれるように、それらと倉庫の壁の間に身を潜めた。

目を閉じ、沙希の姿、存在を強く意識する。この距離から飛ぶのにはもう十分に慣れた。いつもどおり、まぶたの向こうが光る。乗り移るのは一瞬だ。

「沙希、どうしたの？」

目を開くと、いつも沙希のグループにいるショートカットの女子が僕の顔を覗き込んでいた。

まあ、正確に言えば、僕が飛んだ沙希の顔を、だが。

「ううん、なんでもない。ちょっと貧血」

沙希の体に入った僕は、大丈夫、大丈夫、と軽く応えて、すっと立ち上がった。

そんなことより、僕の胸（今は沙希の胸）がときめいた。

ショートカットの隣に、紛れもなくかすみちゃんがいた。

僕を見るその瞳が子猫のように潤んでいる。耳の後ろから胸にかけて流れるような髪からいい香りがしてきた。

「もしかしてダイエット中？」ショートカットがひらめいたように言った。

僕は机の上の弁当をひょいっと手にとって笑う。「まさか、このわたしがダイエットなんてするわけないじゃん。もうおなかペコペコ。さ、行こ行こ」

沙希はいつもあっけらかんとしていて、明るく振舞う子だった。だから佐藤ヒロシの体で観察していて感じた、いつも通りの沙希を演じる。

教室の面々はみんなそれぞれの昼休みを過ごし始めていた。机をくっつけて、グループで弁当を広げる女子たちや、授業中に早弁したのか、早速グラウンドへサッカーをしに行く男子の一団、読書したり、一人で食べている者もいる。

僕（沙希）たちは、というと、ショートカットの女子とかすみちゃんを含めた五人で、まずはみんなでトイレに寄って、それから校舎の屋上に上がってお弁当タイムだ。

屋上にはすでにいろんな学年の生徒がいくつか輪を作っていた。青々としすぎない空と澄んだ空気、降り注ぐやさしい日差しが気持ちよかった。

僕らは屋上の片隅に、輪になって座った。かすみちゃんは乙女座りしたが、僕はいつもの沙希の行動パターンを模倣してあぐらをかいた。みんなそれぞれに持ち寄ったお弁当を開く。

隣の女子が、「あ、沙希のから揚げおいしそう。一個いただき」と言って、ひょいっとつまんでいった。

「じゃあ、わたしはかすみの卵焼きをいただき」

僕もいつも沙希がやっているように、かすみちゃんのお弁当から卵焼きをひとかけら抜き取って口に入れた。

ああ、おいしい。かすみちゃんの卵焼きを頬張っている幸福と、ファーストアクションをなんとか無難にこなせた感激から、僕は心の中で小躍りした。

こんなに至近距離でかすみちゃんと会話することは、女子と付き合ったことはおろか、話すことも稀な僕にとっては

G難度の技といってもいい。声が震えたりどもったりしないように、あるいは箸を持つ手が震えないように、この動作は昨夜、自分の部屋で何度もイメージトレーニングしていた。

僕があまりにおいしそうに食べたからか、「あー、いいなー。わたしにもちょうだい」と、ほかの女子たちもかすみちゃんのお弁当を覗き込んだ。

「よかったら、一つずつどうぞ」

かすみちゃんは弁当箱をみんなに差し出した。卵焼きのほかにも、焼き魚やポテト、ウインナーやアスパラのベーコン巻きがかわいらしく盛られている。

「卵焼き、甘すぎない？」かすみちゃんが不安そうにみんなを見た。

「おいしい！ ふわふわしてて、甘さもちょうどいいよ」女子の一人が絶賛する。

「これもしかして、全部かすみが作ったの？」別の女子が訊いた。

「うん。ちょっとお母さんに手伝ってもらったけど」かすみちゃんが頬を赤く染めてはにかんだ。少し俯いた瞬間に耳にかかっていた長い髪が何本かはらりと垂れた。それを指ですくって耳にかけなおすしぐさが、自然な感じでどきりとした。

おいおい、見惚れてる場合じゃない。僕は今、沙希なんだ。

「かすみはいいよねー、料理うまくて。わたしなんか何度やっても焦がすか崩れるか、卵焼きすら満足にできないんだよ」沙希の嫌味のないあつけらかなとした言い方で、お茶目に嘆いてみせた。

わたしもわたしも、と他の女子たちが口々に共感を並べた。

弁当箱をしまってから、水筒のお茶を飲みながら、女子たちが持ち寄った雑誌を開いた。音楽雑誌、アイドル雑誌、ファッション雑誌といろいろだった。

「わたし、なよなよした男性アイドルよりも、ギターをジャンジャン弾いちゃうムキムキなロッカーのほうが好きだな」

ジャンジャン、という表現はともかく、沙希はロックをこよなく愛する。学校帰りの尾行では、たいていCDショップに寄って、洋楽の中でもマニアックそうなアルバムを視聴していた。

かすみちゃんは、沙希のロック愛談義をいつもにこにこしながら聞いていた。

「こっちの雑誌に占い載ってるよ」

ファッション誌をめくっていた女子たちが言った。

「かすみって何座だっけ」ショート的女子が尋ねた。

「さそり座」

え、かすみちゃん、さそり座なんだ。僕とっしょだ。ていうことは、誕生日近いかも。

またしてもドキドキしてきた。

「さそり座は、『心配事が悪いほうに転ぶ恐れあり。影から支えてくれる人のサポートで乗り切れるかも』だって」

ショートカット的女子が読み上げた占いに、かすみちゃんの顔が曇った。

「ごめん、かすみ、気にした？」ショートが心配そうにかすみちゃんを見た。

「やだ、かすみ、悪いほうに転ぶなんて、ないない。大丈夫だって」と僕もすぐにフォローした。「第一かすみ、心配事ないでしょ」

かすみちゃんは曖昧な表情で微笑んだ。

「この雑誌の占い、全然当たらないしね。わたしの星座、恋愛成就みたいなこと書いてあるけど、片思いの人すらいないのに、ありえないよね」

ショート的女子もかすみちゃんのことを気遣ってか、多少自虐的に言って笑ってみせた。

「わたしさ、今日すっごく香りのいい紅茶入れてきたんだ。かすみ、飲んでみてよ」

別の女子が自分の水筒を開き、コップ代わりのふたに中身を注いだ。ほんのりと桃の甘みが漂った。

はい、と手渡されたコップを、かすみちゃんは両手でていねいに受け取る。ありがと、と言つづばやいて、紅茶を口に含んだ。湯気とともに立ち上る香りを体いっぱい吸い込んで、味わうように喉に流した。

どう？ という女子の問いかけに、かすみちゃんは「おいしい！」と驚き、目を輝かせた。

でしょ、でしょ、と女子も満足げだ。

「沙希も飲んでみて」

女子が言うと、かすみちゃんから女子へ、女子から僕へコップが回ってきた。

「え、いいの？」思わず聞き返してしまった。

「なに遠慮してんのよ。いいもなにも、いつもだったら飲む飲むってはしゃぐくせに」

たしかにそうだ。沙希ならはしゃぐはず。あまりに動揺して、つい本音が出てしまった。

僕の手にあるコップ。みんなが僕を見ている。もちろんかすみちゃんも。

コップを口に運ぶ途中で、気付いた。僕が口をつけようとしているところがほのかに湿っている。これはもしや。かすみちゃんの……？ え、え、え？

僕はコップに口をつけた。

これはまさかの、間接キス！？

紅茶の味より、コップの縁の感触に体中の全神経を集中させた。

体が急に熱を発した。

脇と背中から汗が噴き出す。たぶん、頬も額も耳も火照っているはずだ。

「ちょっと沙希、どうしたの。大丈夫？」

さすがにみんなも僕の変化に気付いたのだろう。心配そうに見つめる四つの顔は、すり硝子で隔たれたようにぼんやりとしか見えない。

想像以上だ、かすみちゃんとの間接キス。

正義だ愛だと騒ぎ立て、彼女を守るためといって沙希に入ってかすみちゃんに近づいておいて、これじゃ完全に変態だ。

僕は体育館裏の倉庫の中の自分に意識を合わせた。

女子たちの声が頭の中の小部屋を反響しながら小さくなっていった。

目の前が光に包まれる。

学校から帰ると力なく自室のベッドに倒れこんだ。

昼休みのあとの授業がなんだったのかさえ、ほとんど覚えていなかった。沙希は自分の体が妙に汗ばんでいたことと、昼休みの記憶がないことから、五時間目の授業を早退して病院へ向かった。

佐藤ヒロシの体で沙希を尾行し、沙希の行動を十分に把握した上で臨んだ今日の計画だったが、ひとつ、決定的に準備できていないことがあった。それは、女子に対する免疫。

もうちょっとと自然に接する自信があったのに、憧れの子と初めて話すのがこんなに緊張するとは。我ながら情けなくなった。

間接キスで気を失いかけた。自嘲気味にも、笑うに笑えない。こんなんでもうやってかすみちゃんを守る？ 守る前に挙動不審を怪しまれて僕的能力がばれてしまうかもしれない。

長いため息が漏れた。

こんな時どうする？

数々の栄光を掴み取ってきたマンガの主人公たちだったら、何をする？

ベッドに仰向けになって考えた。天井の明かりがぼんやりと照っている。

そうだ、修行だ。修行をして克服すればいい。

明日は幸い、学校は休みだ。

かすみちゃんへの免疫力は本人と話し続けないとつけようがないが、まずはいろんな女子、いや、女性と話す機会を作ってみよう。いつも話すことのない女性と、できるだけ面と向かって話すんだ。

= 4. 再始動 re-start =

翌日、早速、女子免疫力向上計画、始動。

毎週末には、父はたいてい夕方から郊外のゴルフ練習場へ打ちっぱなしに出かける。その父を尾行して、途中で父の体に飛ぶつもりだった。

父はゴルフバッグを積んだタクシーで出発した。腕の振りすぎで帰りの運転に支障が出るからだと言っていたが、この不況のご時世に、うちにはそんなにお金があったのか。自転車で後を追うのはかなりの疲労を覚悟していたが、ゴルフ場へ行く手間が省けた。

「あれっ!？」

父の乗ったタクシーは家を出ると、ゴルフ場とは逆の方向に走っていった。それは市の中心部、煌々としたネオンの並ぶ繁華街だった。

もともと父に飛んでから行こうと思っていた場所へ、なんと、ゴルフ場へ行くなどと偽って父自ら来ていた。

ええっ! マジかよ……。父にかぎってそんな人ではないと思っていた。たまに酔って帰ることはあっても、それはただ、飲み屋に寄ってきただけじゃなかったの……。うわあ、めっちゃめっちゃショック。父、あなたは一体なんなんだ。

繁華街にあるビルの一角のドアに、父は吸い込まれるように入っていた。動揺をなんとか抑え、僕はビルの非常階段の奥のゴミ置き場の裏に身を屈める。そこで父に意識を集中した。

「あーん、うれしい。また来てくれたのね。今日もたくさん飲みましょ！」

次の瞬間、天井からシャンデリアが垂れ下がった薄暗闇の中にいた。ソファに腰掛け、丸テーブルの上には高級そうなワインが何本も並んでいた。僕（体は父）の両側には髪の毛が異常なまでに盛られた、きらびやかなお姉さんたちが体を密着させていた。胸元がぱっくりあいたドレスのため、目のやり場に困る。

お酒を飲んだことがないためどうしようか心配していたが、それも杞憂に終わった。僕が頼んでもないのに、どんどんお酒が運ばれ、それをすごいまつ毛のお姉さんたちがどんどんと飲み干していった。極度の緊張のせいで初めはなにがなんだかわからなかったが、これは修行だと自分に言い聞かせ、とにかくたくさんのお姉さんたちと話をした。

自分の体に戻ったり父に飛び直したりを繰り返し（僕がコントロールしていない最中は父もけっこう飲んだようだ）で、結局この日は三軒の店をハシゴして修行に励んだ。父は途中の意識が飛んでいるのもあってか、ひどく泥酔し、帰った後はこっぴどく母に叱られた。このご時世に父のお金の使い方は被扶養者として心配になる。うちはそんなに裕福ではないはずだし、これでよかったんだ。

かくして、修行を経験し、僕はおとといまでの僕とは少しは変わったはずだ。香水の匂いがきつい夜の蝶たちとたくさん会話し、ちょっとは度胸がついただろう。今度こそ、なにがあってもおどおどせず、かすみちゃんを守る。

「かすみちゃんを守ろう」計画、再始動。

月曜の放課後、僕は再び沙希の体に飛んだ。

自分の体はいつもの倉庫に隠してきた。今は沙希の体で、教室にいる。沙希たちと同じグループにいたショートカットの女子は、昨日いきなり隣のクラスのイケメンに告白されたとかで、今日二人で帰ることになったらしく、はりきって校門へ走っていった。

斜め前の席ではかすみちゃんが帰り支度をしていた。かすみちゃんと沙希は帰る方向が違う。いつもなら校門を出て別々の方向に分かれるところだが、今日は沙希の体に入っている僕から、かすみちゃんといっしょに帰りたいと申し出るつもりだった。昼休みだとどうしても他の女子がいるため、一度じっくりと二人で話をしてみたかったのだ。

かすみ、と明るい雰囲気がかすみちゃんに声を掛けようとした時、急にかすみちゃんが振り返った。

「沙希、今日ちょっと話し聞いてもらってもいい？」

なんと彼女のほうからお願いしてきたではないか。しかも、ただならぬ表情で。

一旦僕らは中庭に出て、並んでベンチに腰掛けた。

だいぶ日が傾き、そろそろ地平線に消えていく頃だった。

「ごめんね、いきなり」

かすみちゃんは小さな体をいつも以上に縮こまらせて、ひざの上でハンドタオルをぎゅっと握っていた。

「そんなにかしこまらなくてもいいよ」

僕はそんな彼女をいとおしく思い、いつもの沙希の雰囲気を出して優しく声をかけた。

「沙希は体、もう大丈夫？」

「うん、心配掛けちゃってごめんね」

「早退した日、汗びっしょりで気を失ったから、ほんとに心配したよ」かすみちゃんは、そのときのことを思い出したのか、わずかに声を震わせた。

ごめんね、と僕はもう一度謝った。

「ただのストレスだと思う。柄にもなく受験勉強とか始めちゃってさ。慣れないこと、するもんじゃないよね」沙希が勉強に力を入れているのは事実だ。学校帰りに参考書や問題集を買っているところを見たことがあった。

「あんまり無理しないでね」

「ありがと」

親友のことを心から心配するかすみちゃんを見て、いたたまれなくなった。

ん、心配？

そういえば占いで、さそり座の運勢はなんて言ってたっけ？ たしか、『心配事が悪いほうに転ぶ恐れあり。影から支えてくれるひとのサポートで乗り切れるかも』だった。もしかして、僕が沙希に飛んでるせいで、かすみちゃんの心配事を深めている？ 僕の行為が彼女を不安にさせている？ いや、でも、先日の昼休み、すでにかすみちゃんの様子はどこか変だった。あれはどのタイミングだっけ？

そうだ、たしか、星座占いを聞いた時だ。不吉のことを言われたから、表情が曇ったのかと思ったけど、そうじゃなくて、別の心配事があるのか。

「かすみ、何かで困ってる？」

かすみちゃんから話があると声をかけてきた以上、やはりその内容は言いにくいことなのだろう。

実際のところかすみちゃんは、少し躊躇してから、こくりと頷いた。

「なんでも話して」僕は君を守るためにこうしてここにいるんだから。

「わたしの思い過ごしかもしれないけど……」かすみちゃんが言いにくそうに言葉を切った。「じつは最近、ちょっと気になることがあって」俯いたまま、両手の指を絡めている。

「かすみの悩みは私の悩み」沙希だったらきっとそう言う。

「ありがと、沙希」かすみちゃんは、胸の中で言葉を整理するように一息ついてから、ゆっくりと顔を上げた。「……なんかね、こここのところ、誰かから見られてる気がするの。自意識過剰とかじゃなくて、カメラのレンズで覗かれてるような、変な視線ていうのかな。帰り道もね、なんとなく後をつけられてる気がして。後ろを振り返るのも怖いから、なるべく人通りの多そうな道を通って帰るようにしてるの」

いつもの緊張とは違う種類の汗が出てきた。

そんな……、まさか、かすみちゃんがそんな不安を抱いていたなんて。僕は彼女を守ると誓っておきながら、すでに後手を踏んでいたのか。

「他にもね、話すのも怖いんだけど、郵便物がなくなったり、ゴミがあさられてたりとか」

「それって、完全に悪質ストーカーじゃ」僕は息を飲んだ。

「警察にもお父さんが相談してくれたんだけどね、夜間はうちの周りを巡回してくれるっていうだけで、それ以上はまだ難しいって言われちゃった」

かすみちゃんは恐怖を隠すように笑おうとしたが、それがあまりにぎこちなくて、逆に不憫に思った。

「先日も、窓辺に立ったら外の電柱の影から誰かが私の部屋を覗いてて。もう怖くて怖くて、顔も確認しないままカーテンを閉めちゃった」

電柱……カーテン……、それは、それだけは僕かもしれない……。

「だれか、そういうことしそうな人、心当たりは？」

僕は急いで質問をかぶせた。

「ひょっとしたら、だけど、ピザ屋の宅配の人かなって」

「ピザ屋？」

「去年のクリスマス、ピザを注文したときにね、ちょうど届いたピザを私が受け取りに出たの」

「それがきっかけでその人はかすみのストーカーに？」

「ほんとにそうかはわからないけど、何回か駅やお店なんかで会ったの。挨拶するわけじゃないし目も合わないんだけど、なんか偶然じゃない気がして」

せっかくかすみちゃんと話せたのに、まさかストーカー相談に発展するとは。溜まった不安をすべて吐き出そうとするかのような彼女の饒舌に、胸を鷲掴みにされる思いだった。これ以上かすみちゃんを苦しませるわけにはいかない。

そんなこと、断じていけない！

「いまから、そのピザ屋に行こう」

僕は思い切って提案してみた。

「でも、本当にその人かどうか」かすみちゃんは戸惑いの色を見せた。

「その人がストーカーかどうかはわからないけどさ、私も顔を見ときたいんだ。直接話すのは危険だから、ちょっと離れたところから見てみよう」

「でも、沙希に余計な迷惑をかけることになっちゃう」

「かすみ一人ほっとけないよ。かすみの悩みは私の悩みだつてば」

西の空はまだかろうじてうつつすらと橙色が残っているが、振り返って東を見れば、深い紫の空に星が瞬いている。

沙希の体をコントロールする僕は、かすみちゃんといっしょにピザ屋に向かった。場所を聞く限り、どうやら学校からは近いようだ。

商店街はすでにシャッターを下ろしている店が多く、街灯と行き交う車のヘッドライトだけが足元を照らした。その一番奥の端にピザ屋はあった。

僕らは通りを挟んで向かい側の、少し斜向かいのポストの陰に身を屈めた。

「男の人が二人いるよ。どっちかわかる？」僕はポストの横からピザ屋を覗いた。

かすみちゃんを振り返ると、彼女はポストの裏でうずくまったまま顔を上げない。きっと怖さで体がうまく動かないのだろう。

「大丈夫。向こうからは暗くて見えないから」僕はかすみちゃんの肩に手を置いた。

かすみちゃんは僕を見上げると、意を決したように深く頷いた。「沙希がいてくれて、ほんとによかった」そう言ってポストの横からピザ屋を窺う。

「どう？」

かすみちゃんは首を横に振った。「あの人たちは二人とも違う人だと思う」

「配達に行ったか、休みか。残念だね」

「でも、ちょっとほっとしてる」かすみちゃんが大きく息を吐いた。

「今日は帰ろうか。また明日来よう」

「ごめんね、こんなことにつき合わせちゃって」

「気にしないの」

そうさ、僕は僕の意味でここにいる。沙希の体でだけど。でもきっと沙希だつて、かすみちゃんから相談があれば、こうしていたはずだ。今日帰ってから、また彼女にこの時間の記憶がないことだけが申し訳ない。

「かすみ、家まで送ってくよ」

「え、そんな、悪いよ」

「なに言ってるの。ストーカー話を聞いたその日の夜に一人で帰らせられるわけないでしょ」

かすみちゃんは僕の言葉にどう返していいかわからないようで、うつむいてしまった。

「さ、行こうか」

僕はかすみちゃんを先導するように歩き出した。

「沙希、ほんとにありがとう」

かすみちゃんが僕の後を小走りについてくる。僕が沙希の体を借りずに、僕自身の体でいまこの場にいられたら、周りからはどう見えるんだろう。彼氏が彼女を送るところ、だよな。いつかほんとにそうなれたらいいな。

= 5. 遭遇 contact =

商店街を途中まで戻って、そこから脇の道に抜けると住宅街が広がった。空にあった星たちは、霧のような薄い雲に隠れている。電柱の灯りだけが点々と足元を照らすだけで、ひっそりとしていた。ここは両脇が空き地かブロック塀かで、車どおりも少なく、ストーカーの気配を心配するかすみちゃんにとっては、ひどく心細い道だ。

「だれか、男子に相談する？」

かすみちゃんと二人で歩きながら、思っていたことを投げかけてみた。中身が僕でも体は沙希だ。いざというときに力では及ばないかもしれない。もちろん、『だれか』といってもほんとにだれか別の男子に頼もうとは思っていない。だから、僕が僕の体で彼女を守ることができるなら、そうしたい。今はもう、影で見守るような悠長な状況ではない気がした。

「お願い、それはやめて」かすみちゃんはなんとか絞り出したような声で懇願した。「相談できるような親しい男の子もいないし、それよりも、なんだか恥ずかしい」

「そっか」

「そんなこと言ってる場合じゃないのに、ごめんね」かすみちゃんはまた謝った。

彼女の気持ちはよくわかった。自分がストーカーに狙われているから助けてほしいなんて、仮に沙希が代理でお願いするにしても、かすみちゃんには耐えられないことなのだろう。

「じゃあ、先生に相談しようよ。保健の先生なら親身に聞いてくれると思うよ。それも恥ずかしい？」

かすみちゃんは、首を振った。「ううん、それなら大丈夫」

「よし、明日いっしょに保健室に行こう」

やっと打開策が見えた気がしてうれしくなった。

と、その時。

後頭部に何か触れた。いや、その瞬間は触れたと思ったが、すぐに激しい痛みが走り、体が前へ吹き飛ばされた。なんとか両手をついて、頭から落ちることはなかったが、全身がアスファルトに崩れこんだ。背後から、棒のようなもので、殴られた？

「きゃ」

かすみちゃんが悲鳴を上げようとした瞬間、彼女の口が何者かの手で塞がれた。黒く硬い手、いや、革手袋だった。立ち上がろうにも、頭がふらついて平衡を保てなかった。ひじやひざが擦り切れたか、鋭い痛みが伴う。倒れたまま見上げると、ジーパンにジージャンの若い男が、かすみちゃんに背中から抱きついている。右手は彼女の口を覆い、左手が彼女の体を細い両腕ごとくるむように押さえつけていた。

やめろ、と叫びたかったが、喉の奥で声がつぶれた。

僕は立つに立てないまま、はいはいする赤ん坊のように、ひざをついて四つん這いのまま進んだ。ひざが痛い。沙希にどう詫びていいか、言葉も出ない。必死に男の片足に抱きついた。

「やめろ」今度はなんとか声になった。

男はかすみちゃんに抱きついたまま、足を振って、僕の絡みついた腕をほどこうとした。

僕は決してその腕を放さない覚悟で耐える。すると男は左腕でかすみちゃんの首に回し、ぎゅうっと絞め始めた。「足を離さないと、もっと絞めるぞ」

ささやくような男の声に、一瞬怯んで力を抜いてしまった。男の足が絡み付いていた僕の腕をすりと抜ける。そしてすぐに、上がった足が再び振り落とされた。ちょうどサッカーボールを蹴るように僕の（いや、体は沙希なのだが）わき腹を捕らえた。地面から何センチか体が浮くほどの強さだった。全身を強く締め上げられたような衝撃に、完全に息が詰まった。

男は蹴り上げた勢いでバランスを崩し、かすみちゃんとともに倒れこんだ。かすみちゃんは混乱と恐怖からか、目をつむり、涙を流していた。

僕はもう、立ち上がるどころか、息をするのも大変な状態だった。意識が徐々に薄れ始める。

まずい。このままじゃ決定的にまずい。

僕は強く目を閉じた。

体育館裏の倉庫は闇に包まれており、抜け出るのにこずった。空き缶の入った籠が崩れる音がしたが、そんなことにかまってはられない。

沙希の体から一旦自分の体に戻った。こうするしかなかった。学校からさっきの場所までそんなに遠くはない。全力で走ればなんとかかすみちゃんを助けに間に合うはずだと判断した。

倉庫の裏の垣根をよじ登り、校庭から出た。道路を横切り、住宅街へ続く道をひた走る。

くそう！ まさかきそり座の占いが当たるなんて。このままかすみちゃんを守れなかったら僕は一生後悔する。沙希にだって顔向けできない。こんなに体を借りて、そしてその体に傷まで負わせてしまった。かすみちゃんがあの男の手にかかってしまったら、僕はこれから生きていけない。

絶対守る。なんとしても。

ただひたすらに、走った。

ブロック塀の続く通りの角を曲がると、数十メートル先に、もつれ合う人影が見えた。「やめろー！」僕は叫びながら駆け寄る。

道の脇では、沙紀が先ほどの位置で気を失って倒れていた。

沙希、ほんとにごめん！

目を向けた先では、かすみちゃんが仰向けに倒れ、男がかすみちゃんの両足に自分の体を挟ませる形で上になっていた。これまで必死に抵抗したのか、かすみちゃんの制服は、腕の部分がところどころ擦り切れていた。

今にも、男がかすみちゃんの制服の胸の部分を両手で掴み、破ろうとしている。

僕の大切なかすみちゃんが、こんなわけのわからない男に卑しめられるなんて、そんなの、そんなの、絶対に認めない！

僕が男に飛びかかろうとした、その刹那。

「え？」

目の前で、信じがたい光景を見た。

「かすみ……ちゃん？」

制服を掴んでいた男の腕を、かすみちゃんの両手が覆い、くい、と引き離す。男は驚きを隠せず一瞬体を反るが、今度はかすみちゃんの首を絞めようと手を出した。

すると、かすみちゃんが仰向けのまま両足を自分の胸の辺りまで引き上げる。左足はそのままに、右足の太ももを男の首に当てた。男はかすみちゃんの両足に右腕と首を挟まれる格好になる。ここまでで、一度も瞬きする余地がなかった。

かすみちゃんは右ももに男の首を当てたままひざを折った。ほぼ同時に右足の甲を左足のひざ裏に引っ掛ける。左ひざ、右ひざ、右ももがトライアングルを作り、その中に男の右腕と首が挟みこまれた。

この姿勢、ていうか、技、どっかで見たことがある。

腕ひしぎ、じゃなくて、なんだっつけ。

姉がよく観ている格闘技の試合で、何度か目にした技だ。

トライアングルの形で絞め上げる……、

三角絞め。

そうだ、それだ。でも、一体なんで、かすみちゃんがそんな技を？

かすみちゃんは、両足に挟んだ男の頭を左手で自分の腹に押さえつけ、男の右腕をもう一方の手で引っ張り上げた。完全に極まっていた。

この技はたしか、足の絞めつけによって、腕で自分の頸動脈を絞めさせる危険な技だ。レフェリーが止めなければ、技を掛けられた側は『落ちる』。つまり、気絶するということだ。

「かすみちゃん」

僕はもう一度彼女の名を呼んだ。

男の体からはすでに、意思や力が感じられない。

自分の上にぐったりと覆い被さる亡骸のような男を横にどかし、かすみちゃんはゆっくりと体を起こして立ち上がった。めくれ上がったスカートの裾を直す姿は、明らかにいつもの、というか先ほどまでのかすみちゃんとは違った。

= 6. 超越 transcendent =

「君か、いろいろ動き回っていたのは」

かすみちゃんが、くぐもった声で静かに言った。

「かすみちゃん？」いや、僕にはもう、尋ねながらにわかっていた。彼女はかすみちゃんじゃない。

「私はこの子の、かすみの体を借りている。君も大変だったな。まさかいきなり襲われるなんて」かすみちゃんの中の誰かが、表情は一向に変えないまま、言葉だけで気遣いをみせた。

「一体、誰なんです」

「君と同じ能力を持つ者」

「同じって、人の体に飛べるってことですか」

「面白い質問をするな、君は。見ての通りだよ。かすみちゃんはこんな話し方をしないだろ」

雲に隠れていた月が顔を見せ、僕の背後から光を届けた。

照らし出されたかすみちゃんの表情は静かに笑みを浮かべているものの、その瞳は僕の心の中の動揺を見透かすように冷静な眼差しだった。

「君は飛ぶという言葉を使っているようだが、まだまだお遊びというか、暇つぶしだな」

僕は憤りを抑えて尋ねた。「他にもいるんですか、同じような人たちが」

「いるとも。能力を悪に使う者たちのことを、我々は『乗っ取り』と呼んでいる。世界中で起きる凶悪犯罪、国家が主導的に起こす戦争なんかは、ボスや国家元首が体を乗っ取られて起きていることが多い」

「他人の体を乗っ取って、戦争やテロを起こすなんて」

「アメリカ大統領が乗っ取られて核のボタンを押せば、世界は終わる」

「アメリカ大統領まで、ですか」

「起こりうる未来の危機。仮定の話だ」

僕は胸をなでおろした。

しかし、僕が空想で思いついた邪な考えは、たしかに凶悪な人間だったら実行しようとしてもおかしくはない。

「我々は乗っ取りによる大きな惨劇を招かないよう、日々、世界中で組織的に監視体制を敷いている」

「でも、どうやって僕のことを」

「そうだ、いくら世界中で監視しているといっても、調べきれんのだろうか。世界は広い。日本だって、一億以上の人の中からこの能力を持つ人間を探し出すなんて、不可能に近い。」

「できるわけがないという顔をしているな」

「そんなこと……」凶星だった。

「君はこの、かすみという少女を守るため、そっちで倒れている沙希という子の体を乗っ取っていた」

「乗っ取るだなんて」

「これは失敬。君の言葉で言えば、飛んだ、ということか」

かすみちゃんの、いや正確に言えばかすみちゃんの体をコントロールする誰かの意識が変化したのか、彼女の顔に優しさが浮かんだ。

「さきほど君の行為を『パスタイム』（暇つぶし）と呼んだが、まあ、志は買おう。愛のために、なんてところがとてもいい。いわば、『グレートパスタイム』（大いなる暇つぶし)か」

グレートパスタイム……。

「せっかくだから一つ教えてあげよう。君をどうやって特定したか」

僕は口の中に溜まった唾をごくりと飲み込んだ。

「難しいことではない」かすみちゃんは腕組みした。「君も把握しているように、他人の体に飛べば、コントロールされる人間は、その間の記憶がなくなる。数秒のことであればたいしたことはない。酔っ払っている人間ならよくあることとして片付けられる。ただ、君のように、その時間が長くなればなるほど、記憶のない人間は不安がる。そうしたらどうする？ 沙希や、君の姉のような人は」

いつも理屈の通らない言動ばかりしていた姉は、ついに先日、病院へ連れて行かれた。沙希も。

「我々の組織は、病院や精神病院にネットワークがある。記憶が曖昧だという患者がある地域で急に増えれば、誰だつてその周辺を怪しむ」

姉なんて、身内だから飛びやすいと思っていたけど、怪しまれたらたしかに、僕が真っ先に疑われる。

「あの……」僕は、ある質問をしたくて、それが喉のあたりまでこみ上げてきたものの、最後に躊躇して口ごもった。

「かすみが我々と関係あるのか訊きたいんだろう」

先に提示された。さっきから、すべて見透かされている。

「安心しろ、この子は違う。緊急避難的に乗っ取った。本当はしばらく君の動きを観察しようという好奇心もあったんだが」

僕の非力を見てたのか。それに怒ろうという気力もなく、うなだれた。

「君と同様、私も話したことの無い人間には飛べない。だからかすみに飛んだ」

「かすみちゃんとは、面識があるんですね」

「彼女は気付いてないだろうけどね」

「誰なんです、あなたは」

かすみちゃんは、いや、誰かわからない相手は、僕の質問に答えなかった。代わりに一言、

「この子を守りたいなら、もっと強くなれ」

そう言い放った。

かすみちゃんの体は、糸の切られたマリオネットのように地面に崩れた。

「かすみちゃん！」

僕が叫んだ直後に、背後の、電柱の影から気配と声がした。

「心配ない。私が彼女の体から出たため、一時的に意識を失っているだけだ」

僕が振り返った先、倒れている沙希の隣には、知っている顔が立っていた。

「佐藤ヒロシ！」

マジかよ。

おいおい、なんてこった……彼だったのか。

僕がさんざん飛んでいた佐藤ヒロシにも同じ能力があったなんて。しかも、僕のことをずっと監視していたとは。

くそっ、まったく気付かなかった……。

「誤解してないか」

佐藤ヒロシは動揺する僕の顔を訝しむように眺めた。

「この体、佐藤ヒロシを使って、君たちを何回か尾行した。そして今日も」

え、なに？ 僕は混乱した。

かすみちゃんをコントロールしていたのは佐藤ヒロシじゃない？

だったら誰なんだ。もう、何がなんだかわからない。

「君も佐藤ヒロシに飛んでいたな。たしかに彼は扱いやすい。まさか私以外にも君たちを観察していた人間、ストーカー？ 通り魔？ まあどちらでもいいか——そいつがこのタイミングで接触してくるとは」

佐藤ヒロシの目が、吸い込まれるような暗い目に変った。

「今日は疲れたよ。佐藤ヒロシに飛んで、そこからさらにかすみに飛んだんだからな」

それを聞いて、頭がくらくらした。

「そんなことまでできるんですか」僕には到底難しそうな能力だ。

「W/J（ダブルジャック）、そう呼んでいる。できる人間はわずかだ」

すごい、この世界にそんな人がいるなんて。

よくよく考えれば不思議なことだが、このとき僕は敗北の苦渋ではなく、佐藤ヒロシの中にいる誰かに、正直、憧れ

を感じた。

「あとは警察に連絡を入れろ。男はナイフを隠し持っていた。これは勘だが、おそらく前科がある。そういう人相だ。これでブタ箱行きは免れまい」

振り返ると、いまだに男はぐったりとしている。

「女の子二人は心のケアが必要だぞ。そこは君が責任を取れ。じゃあ、私はこれで」

佐藤ヒロシの中の誰かが、彼の体から意識を抜いてしまうその前に、僕は懇願するように叫んだ。

「待ってください！」

佐藤ヒロシの目が焦点を取り戻した。

「まだなにか？」

「僕を、組織に入れてくれませんか」

僕と、つきあってもらえませんか。

僕はかすみちゃんに告白するのと同じくらいの勇気を振り絞って、膨らむ想いを声にした。

佐藤ヒロシはしばらくの間、品定めでもするようにまじまじと僕を見つめた。いや、その目は獲物の動きを観察する肉食動物のようにも思えた。

「前言を繰り返す。彼女を守りたいなら、強くなれ」

そんなことは一人前になってから言えということか。

「せめて、あなたが何者なのか教えてもらえませんか」

佐藤ヒロシは不気味なまでに口角を上げた。

「それは秘密。君は私の名や年齢どころか、顔や性別すらもわからないだろう」

言い終わると同時に、佐藤ヒロシがひざを折ってその場に崩れた。

僕の周りに、佐藤ヒロシ、沙希、男、かすみちゃんが倒れている。

全ての音が奪われたかのように、静けさが辺りを包んだ。

僕はまず、ゆっくりとかすみちゃんの元に歩み寄り、彼女を抱きかかえた。

*

= 7. 終幕 epilogue =

放課後を知らせるチャイムが校内に鳴り響く。

教室から廊下へと、一斉に生徒が溢れる。

僕はゆっくりと廊下を歩きながら、すっきりと晴れ渡った空を眺めた。再び、いつも通りの日常を過ごす幸せを感じた。

男は無事捕まり、かすみちゃんや沙希たちは警察に保護された。彼女たちは幸い大きな怪我もなく、三日間の自宅療養の後、今日ようやく登校した。

事件の真相は、みんなにはわからないままだ。

初めは、かすみちゃんと沙希が下校途中に通り魔に襲われそうになり、それを佐藤ヒロシが救ったのではないかと噂が流れた。しかし、パトカーが到着したとき彼には傷一つなかったことから、現場を目撃したショックで気を失っただけではないかと結論付けられた。その後は、謎のヒーローが男を倒したのでないかという説が有力となっている。

僕は警察を呼び、すぐにあの場を去った。

自分の力を詮索されなくなかったし、事件が解決した今、かすみちゃんのことはいよいよこれからも、影から守ろうと思った。

そうだ、これでいい。

昇降口に着くと、上履きを脱いだ。それを下駄箱へ収めようと身を屈めたとき、後ろから声をかけられた。

「あの……」

体を起こしながら振り返ると、目の前にかすみちゃんが立っていた。スカートの前でカバンを持ち、俯きがちに頬を赤らめている。

「お礼が遅くなって、ごめんなさい」

僕は突然の彼女の言葉に動揺した。返す言葉も見当たらないまま、棒のように立っていた。

「あの時、わたしのこと助けてくれて、ありがとう」

「いや、僕は……」

急に心臓の鼓動が早まった。

あの日のことを彼女がどこまで覚えているかわからないけど、その一言が僕を勇気づけた。

「それじゃ」

かすみちゃんは軽く会釈すると、急いで靴に履き替えて、小走りで外へ向かった。

彼女の踊るように跳ねる後ろ髪をしばらく見つめた。

君は僕が守る――。

僕の能力に関する『本当に語るべき話』は、今この瞬間、幕を開けた。

最後までお読みいただきありがとうございます。

この作品は短編として書きましたが、もっともつこの能力を使ったおもしろいお話を書きたい

、

いえ、それ以上に読んでみたいと思っています。

そこで、もし参加していただけるようでしたら

「能力」に関する基本設定（5つのルール）のみ踏襲したスピンオフ作品や続編、

全く異なる世界観の作品を書いていただける方をお待ちしております。

おそらく、もっともつとおもしろい世界観が存在するのではないかと期待しております。

登場人物、時間軸など自由に創作し、とくにご連絡なく、お好きに公開していただけてけっこうです。

関連性がわかるよう、できましたらタイトルのみ、

「Great Pastime」もしくは「グレートパスタタイム」を含む題名でお願いいたします。

遊び心をもって、この場でいろんな方とつながりをもてたら幸いです。

slow その他の公開作品

『弓道少女』（掲載中）

『きんぎょすくい～弓道少女・光井楓～』（読みきり）